

平成 30 年 6 月 23 日現在

機関番号：31302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02014

研究課題名(和文) 記憶に関する現象学的・精神医学的研究

研究課題名(英文) The Phenomenology and Psychiatry of Memory

研究代表者

小林 睦 (Kobayashi, Mutsumi)

東北学院大学・教養学部・教授

研究者番号：20292170

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、記憶の構造を統合的に理解するための「心のモデル」について考察することを目的としていた。具体的には、記憶の原理としての「連合」と記憶の病理である「解離」とを対照し、両者の関係性を検討することを行なった。そこから明らかになったのは、「解離」は「連合」の単なる欠如態ではないということ、むしろ、我々にとっての「心」のあり方は、本来離散的な複数の記憶体系として存在しているということ、通常は「連合」の働きが離散的な記憶体系を統合しているが、心的外傷体験をきっかけに「連合」が機能不全に陥り、離散的な記憶体系がむき出しになる現象が「解離」ではないか、ということである。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to consider "the model of mind" to comprehensively understand the structure of memory. Specifically, we contrasted "association" as <principle of memory> and "dissociation" as <pathology of memory> to examine the relationship between both. What was clarified there was that (1) "dissociation" is not merely a lack of "synthesis", (2) rather, human "mind" originally exists as multiple discrete memory systems, (3) usually, the functioning of "synthesis" integrates a discrete memory system, but some traumatic experiences trigger malfunction of "association", and as a result, the discrete memory system is exposed. This is the fundamental structure of "dissociation".

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：現象学 フッサール 連合 精神医学 P.ジャネ 解離 心的外傷 心のモデル

1. 研究開始当初の背景

本研究は、これまで申請者が行ってきた知覚の分析から記憶の分析へと、研究の主題を転換・展開するものである。

知覚に関する現象学的な研究は、フッサール以降、メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』を経て現在に至るまで、多様な仕方で行なわれてきた。申請者によるこれまでの研究も、これら知覚研究の延長線上に位置づけられるものである。その研究の主要な目的は、現象学と心理学・認知科学との関係を、知覚の本性という観点から問い直すことにあった。

そうした研究過程において、申請者は、意識現象の解明をさらに推し進めるためには、私たちの知覚経験を記録し、保存する記憶の働きについて考察する必要がある、と感じるようになってきた。研究の主題を知覚から記憶へと転換し、記憶に関する現象学的な研究を行なうことを試みたゆえんである。

2. 研究の目的

本研究は、現象学および精神医学の両面から、記憶という意識の形態を分析し、その基本的な機能を明らかにするべく、具体的には以下の作業を行なうことを目的としていた。すなわち、記憶システムを可能にする「連合 (Assoziation)」のあり方を現象学的な観点から分析するとともに、記憶の病理としての「解離 (Dissociation)」にかんする精神医学的な研究をたどり直し、記憶の通常態と欠如態とを照らし合わせることである。そうすることにより、記憶の基本構造を統合的に理解することができると思われたからである。

より具体的に言うならば、本研究の目的は、(1) E. フッサールが唱えた現象学的な「連合」概念について、心理学的な「連合」概念

との異同を明らかにすることにより、現象学的に捉えられた記憶のあり方がどのようなものであるかを検討すること、(2) 19世紀フランスの心理学者 P. ジャネによって発見された「解離」現象をめぐる、現代の精神医学者たちが展開している解離研究をも参照しつつ、「解離」における記憶障害のあり方を確認すること、(3) 現象学的な視点から描き出される「正常」な記憶のあり方と、精神医学的な視点から記述される「異常」な記憶のあり方を相互に照らし合わせることによって、記憶の基本構造を明らかにし、そこから見えてくる「心のモデル」を提示すること、であったと言える。

3. 研究の方法

以上の目的を実現するために、本研究が採用した方法は、現象学の知見と精神医学の知見とを比較する、というものであった。換言するならば、それは、現象学における「連合」概念と精神医学における「解離」現象を取り上げ、両者を比較対照することにより、「解離」という記憶の病理から「連合」という記憶の原理のあり方を浮き彫りにする、というアプローチであった。

(1) 記憶の原理に関する研究としては、19世紀の要素心理学、特に、フッサール自身が批判の対象としたヴントやブレンターノなどの心理学的な「連合」概念と、感覚体験の全体的な際立ちを可能にする現象学的な「連合」概念との異同について検討した。その際、ゲシュタルト心理学における「プレグナンツの法則」などとの関連も考慮にいれつつ、主として19世紀後半から20世紀前半にかけてドイツで影響力をもった心理学説との比較研究を行なうことにより、現象学的な連合理論の意義を捉え直すことを試みた。具体的には、フッサール現象学において提唱された「連合」概念を中心に、フッサールの諸

著作のうち、『受動的綜合の分析 (1918-1926)』(Hua.XI)や『表象・像・想像 (1898-1925)』(Hua.XXIII)などを参照しつつ、検討することを試みた。

(2) 記憶の病理 に関する研究としては、F.C.パートレットによる古典的研究『想起 実験心理学および社会心理学研究 (Remembering: A Study in Experimental and Social Psychology)』から、スクワイア&カンドルらによる最新の研究『記憶 心から分子へ (Memory: From Mind to Molecules)』に至るまで、心理学的・生物学的な先行研究が数多くある。しかし、本研究が主として参照するのは、記憶の病理 に関する精神医学的な研究であり、具体的には「解離」現象をめぐる研究である。具体的には、19世紀フランスの心理学者 P. ジャネによって発見された「解離 (désagrégation, dissociation)」現象をめくって、近年 F.パトナムや O.ヴァン・デア・ハートなどが展開している「解離性同一性障害 (Dissociative Identity Disorder : DID)」研究を参照しつつ、解離における記憶障害のあり方を確認した。

(3) 以上の(2)と(3)の成果を比較検討することを通じて、記憶の基本構造を統合的に理解し、そこから見出すことのできる「心のモデル」を提示することが、本研究の最終的な目標となった。

4. 研究成果

年度ごとの研究成果は以下の通りである。

(1) 平成 27 年度：研究初年度は、現象学における「連合」概念が、記憶 という意識の働きにおいて果たす役割を明らかにする作業を行なった。そのための主要な課題となったのは、以下の2点である。

まず、フッサール現象学において提唱された「連合 [= 連想] (Assoziation)」、「過去把持 (Retention)」、「想起 (Erinne

rung)」、「再想起 (Wiedererinnerung)」などの概念について、フッサールの諸著作のうち、『受動的綜合の分析 (1918-1926)』(Hua.XI) 第三部「連合」、『時間意識についてのベルナウ草稿 (1917/18)』(Hua.XXXIII) 第6部「再想起の現象学」を中心に、検討することを試みた。特に、「連合」とかかわる諸概念のうち、「対照」「触発」「覚起」「対化」などのあり方について、フッサールの著作を読み解く作業を行なった。

次に、「連合」概念にかんする現象学的な先行研究として重要な、ホーレンシュタイン『連合の現象学』を精読し、ミルやヴントなどの要素心理学における心理学的「連合」、ブレンターノにおける「根源的連合」、フッサール現象学における超越論的「連合」について、概念史的な観点から、その異同を確認する作業に従事した。

以上の研究成果の一部は、『現代哲学キーワード』第10章「人間」(有斐閣双書)として発表された。

(2) 平成 28 年度：研究次年度は、人間の意識の統合を可能にする 記憶 の機能を明らかにするために、記憶の障害 である「解離」現象について検討する作業を行なった。実際には、以下の2点が主要な課題となった。

まず、19世紀末から20世紀初頭にかけて、P. ジャネが、「解離 (dissociation)」という現象を、どのように捉えていたのかを確認する作業を行なった。ジャネの解離論は、現代の精神医学的な解離研究の重要な源泉となっているからである。具体的には、その主著『心理学的自動症 (L'automatisme psychologique)』にもとづいて、彼の言う「心理学的統合不全 (解離)」概念を検討した。その上で、19世紀末頃に「ヒステリー」と呼ばれたさまざまな「麻痺状態」が生じる原因を、「解離」という同じ一つの病態から解釈する理路を辿ることを行なった。また、ジャネの先駆性に関するエランベルジェ (エレン

ベルガー)の諸研究(『無意識の発見』『著作集』等)を参照しつつ、フロイトとは異なるジャンエの解離論の意義を再検討することも必要となった。

次に、現代の精神医学における解離研究の成果を分析する作業を行なった。1960年から70年代にかけて行なわれたヴェトナム戦争以降、また、1995年に起こった阪神淡路大震災以降、北米や日本ではいわゆる「解離性同一性障害(Dissociative Identity Disorder: DID)」の患者の存在が報告されるようになった。こうした時代背景にもとづいて、近年の欧米では(そして日本でも)解離研究が大きく進展したと言える。本研究では、それら現代の解離研究のうち、特に重要な病態理論として、F.パトナムの学説(「離散的行動状態モデル」)、および、ヴァン・デア・ハートの学説(「構造的解離理論」)について検討することを行なった。

(3)平成29年度:最終年度の研究は、前年度までの研究成果をふまえて、記憶の構造を統合的に理解し、そこから考えることのできる「心のモデル」を提案することを試みた。そのための主要な課題となったのは、以下の2点である。

まず、記憶の原理としての「連合[=連想](Assoziation)」と記憶の病理である「解離(Dissociation)」とを比較対照し、両者の補完的な関係性を分析する作業に従事した。こうした作業を通して明らかになったのは、「解離」は「連合」の単なる欠如態ではなく、むしろ、統合されていない離散的な記憶システムが併存している状態こそが「心」の原初的なあり方だ、ということである。

次に、の所見をふまえて、記憶の基本構造を理解するための「心のモデル」を検討することを試みた。こうした研究から推定された「心のモデル」の特徴としては、第1に、私たちの「心」のあり方は、本来「離散的な」

複数の記憶システムとして存在していること、第2に、通常は「連合」の働きが離散的な記憶システムを統合しているが、心的外傷(トラウマ)体験などをきっかけに、「連合」が機能不全に陥るということ、第3に、こうして離散的な記憶システムがむき出しになる現象が「解離」だということ、以上の3点を挙げることができる。

こうした研究成果の一部は、『人間探究 現代人のための4章』第2章「心の哲学 思考・身体・人工知能」(金港堂)として発表された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

小林 睦、現象学とギブソン 「表象」概念の位置づけについて、東北哲学会年報、査読有、第32号、2016、pp.63~81

[学会発表](計1件)

小林 睦、現象学とギブソン 「表象」概念の位置づけについて、東北哲学会、2015年10月14日、福島大学

[図書](計3件)

野家啓一・門脇俊介 編、小林 睦 他、有斐閣双書、現代哲学キーワード、2016、pp.203-223

直江清隆 編、小林 睦 他、岩波書店、哲学トレーニング2 社会を考える、2016、pp.182-191

佐藤透 編、小林 睦 他、金港堂、人間探究 現代人のための4章、2017、pp.63-119

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

なし

6．研究組織

(1)研究代表者

小林 睦 (KOBAYASHI, Mutsumi)

東北学院大学・教養学部・教授

研究者番号：20292170

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし